

Milkring



コスプレ広場の人妻英霊



灼熱の太陽の下、ビッグサイト周辺を
人の群れが埋め尽くす。

お盆と年末の時期に毎年行われる同人誌イベント、
コミックスマーケット…通称『コミマ』。
今日は夏開催の夏コミ、その二日目にあたる。

おそらく、現在の東京都下でもっとも
人口密度が高いであろうこの場所には、
若年層を中心に数万人の男女が集っていた。

おのおのがそれぞれの欲望に忠実に従い、
闊達に歩を進めている。
酷暑の中、額から流れ落ちる汗をぬぐいながらも、
参加者の顔はみな精気に満ちていた。



かくいう俺も、普段はしががない社畜として地味な生活を送っているが、この時ばかりは氣勢を上げ、少ない給料の中から貯めたお金で上京する。

弱小ではあるが、俺自身もコミマにサークル参加している身。配布するために作っている同人誌は、男性向け二次創作の本。俺の本番は三日目…つまり明日だ。

しかしながら今日、二日目にも、企業ブースを回ったり、お目当てのサークルを覗いたり、濃厚で充実した時間が約束されている。

そして…同人誌のほかにも全国、いや世界から多くのコスプレイヤーが参加する『コスプレ広場』での写真撮影も、俺の大きな楽しみのひとつだった。



会場にはいくつかのコスプレエリアがあるのだが、
その中でもなぜか、一番人口密度が高いのが
北館と南館の間にある『ふれあい庭園』エリアだ。

どういう経緯でそうなったかは不明だが、
庭園エリアには露出度の高い、
セクシーなコスプレイヤーが数多く集う。

よくSNSで晒されているローアングラーや
盗撮カメコなど、マナー無用の
カメラマンも数多く集っており、
「エロい写真を撮るなら庭園」という風潮が、
いつの間にかできあがっていたのだ。



言い方は雑だが、手っ取り早く
オカズを撮りたいなら、
庭園のコスプレ広場に行けば間違いはない。

そして俺自信も、豊満な体型の
露出コスプレイヤーが好物であり、
コスプレ広場に行く目的も、
彼女たちの撮影が目的だった。

この日も俺は、買ったばかりの
ミラーレス一眼を手に、ズボンの前を
膨らましながら庭園へと足を踏み入れた。

そして……庭園に入るなり目についた
『カメラマンたちの囲み』の中心で、
俺はとある女性コスプレイヤーを発見する。

「目線下さい!」「こつちにもお願いします!」
四方から、熱気を孕んだカメラマンたちの声が飛ぶ。
彼らのレンズが向けられていたその先には、
露出度の高い衣装に身を包んだレイヤーがいた。

ぷるんっ♡

ゆさっ♡

パニャツ

パニャツ

胸元の大きく開いた服を着て、右手には剣、左手には盾。
それは、俺がハマっているソシヤゲに登場するキャラクター、
『ブーデイカ』というサーヴァント……人妻の英霊だった。

容赦ない日射しが照りつけるなか、ブーディカのレイヤーさんは
ポーズを決め、カメラ目線を四方に投げる。
特筆すべきは、その豊満な肢体だ。

パンチャツ

ぷるん♡

あちい♡

パンチャツ

パンチャツ

原作を凌駕するようなたわわな乳房、肉付きのいい腰回り。
決して引き締まっているとは言えない、たるんだ体つきだったが、
『人妻』キヤラには相応しいと思える外見だった。

そして……よく見ると、胸当ての端からはチラチラと、乳輪、いや、乳首そのものが見え隠れしている……!!
本人は気付いていないのか、それとも故意で見せているのか……。

パニヤツ

ちらっ♡

ポロツ♡

パニヤツ

パニヤツ

周囲に群がるカメラマンは誰もそのことを指摘せず、ただ黙々とシャッターをきり続け、「お宝写真」を量産していた。と、そのとき……

「すみません、ポーズ変えてもらえますか！」
一人のカメコが放った言葉に応じて、ブーデイカさんは腕を高々と上げる。

(……!)

むわっ♡

ふさっ♡

次の瞬間、腋の下に見えたのは……黒々と繁茂する腋毛であった。

剃り残しとかいうレベルではなく、濃く、淫猥な茂みが、

ブーデイカさんの腋の下に隠されていたのだ。

周囲からフラッシュが閃き、その卑猥な腋毛をデータに収めていった。

「はぁーっ、はぁーっ……あ、あぁっ……♡」

微かに聞こえる、熱を孕んだ息づかい。ブーディカさんの頬は朱色に染まり、高々と上げられた腕が、荒い息に同期してゆっくりと揺れる。

はぁっ♡

んぐう♡

かぁぁっ♡

黒々とした腋毛を見て、カメラを下ろしたもののや、困みから退出するカメラマンもいた。

おそらく、彼らの趣味に合わなかったのだろう。しかし、ほとんどのカメラマンはその場に残り、ハミ乳首と腋毛ショットをカメラに収め続けていた。

パニヤッ

パニヤッ

むちっ♡

しかし。不意打ち同然に現れた腋毛にあっけにとられていたら、ブーティガさんは腕を下ろし、ポーズを変えてしまった。

(くそっ、しまった、撮り逃した…！)

俺個人としては、腋毛と熟女の組み合わせは大歓迎だったのだ。

たゅんっ♡

慌ててカメラを構え直し、ブーティカさんへとレンズを向けると、そこで俺は……
奇妙な既視感に囚われてしまった。

パンチャツ

パンチャツ

『あれ？ 俺……この人、知ってるぞ』

豊満な肉体を窮屈そうな衣装に包み、
乳輪をチラ見せさせながら
写真撮影に応じるコスプレイヤー。
俺は確かに、この顔つきに見覚えがあった。

よく見ると、パンツからは剛毛がはみ出ており、
縮れ毛がヘソの下まで繋がっている……！
このだらしなさが逆に俺の官能を刺激し、
ズボンの中のチンポは痛いくらいに反り返っていた。

でも……俺はこの人をどこで見たんだろう。
AV女優か？ グラビアアイドル？

それとも、ツッターのタイムラインで流れてくる
エロレイヤーの写真で見たのだろうか。

俺は熱気で朦朧とするなか、今一度記憶の引き出しを詮索し、
なんとか手がかりを引っ張り出そうとする。

そして……目の前のブーティカさんに向けて
何度もシャッターを切るうちに、
体の一部に、その『手がかり』を発見したのだ……!!

撮影の囲みがコミマスタッフにより解散させられ、
一時的に生じた隙を見計らい、
俺はブーティカさんの前へと進み出た。



「あ、あの……商品開発部の八島主任、ですよね？」

俺がおそろおそろの声をかけると、
ブーデイカさんは驚きで目を見開く。

「……！ キミは営業部の……!? えっ？ どうして……!?」

ブーデイカさんが驚きで体を揺らすと、
服の端から乳首がこぼれ落ちているのが鮮明に見えた。

ぷるんっ♡



「や、やっぱりそうだ…似てるな、って思ったんですよ、八島主任に」
「え？ え？ う、うそ…あなたも、コミマに参加するようなタイプだったの？」
ブーデイカさんはそう言うのと、驚きを隠すことなく俺に視線を注ぐ。

…やはり、俺の予想は当たっていたようだ。
俺は、ガチガチに勃起したチンポがバレないように、
持っていたショツパーで、ズボンの前を隠しながら会話を続けていった。

八島……たしか、下の名前は美佳。
俺が勤める文房具会社、開発部の主任だ。

社員数は三十人にも満たないので、
社内人間は全員ほぼ顔見知りだ。
八島主任はすでに結婚しており、
子供もいると聞いたことがある。

俺は営業課なので直接の部下ではないが、
彼女の存在は強く認識していた。

というか、ふくよかなバストと
パツパツに張ったケツは
すこぶる俺の好みだったので、
ときどき社内で盗撮しては、
オカズに使わせてもらっていたのだ。

俺のスマホの中には、階段を昇る
八島主任を下から盗撮した写真や、
ハンカチを落とした時に偶然取れた、
ケツを突き出した写真などが
密かに収められている。

「で、でもよく……私だとわかったわね。いやだ、恥ずかしい……」
「えーとですね、首筋、ココです。」

八島主任の首のところ、ホクロがあるでしょ？」
「あ……そうね、あるわね、確かに」
「それでわかったんですよ、偶然覚えてて……」

「キミ、部署が違うのによく覚えていたわね……」

廊下でときどきすれ違ってくるのに、記憶力がいいのかしら」

「いいやあ、そんな、ははっ……」

まさか、盗撮していた写真にホクロが映っていたから
しつかり記憶していたとか、本人には言えないな……」



「で、でもスゴいですね八島主任のブーディカコス、感動しちゃいましたよ」

「あ、えつと……本名バレはまずいから、コスネームで呼んでくれないかな。コスプレしているときは『やしや』って名前なの」

「す、すみません！ じゃあ、やしやさん……」

ここまでセクシーなブーディカコス、はじめて見ました！

なんか言い方はヘンですけど、まるでエロ同人から出てきたみたいで……あ、ごめんなさい、褒めてないですねこれ」



「ふふ、無理して褒めなくてもいいわよ。
むしろ『ババア無理すんな』って感じよね」

「いいいや、そんなこと無いですよ……！
あ、よければその、何枚か写真撮らせてもらえますか？」

んごっ

「ええ、私でよければ。でも、会社のみんなには内緒にしておいてね」
「わかりました、よろしくお願いします！」



俺と八島主任……やしやさんは会場のすみに移動すると、
なんとか空きスペースを見つけて撮影を開始した。
庭園の中心部分は立錐の余地もないほどに混んでいるが、
すこし離れると撮影スペースはいくらでも見つかるものだ。



やしやさんの近くに行くと、制汗剤でも隠しきれない
香しい体臭が漂ってくるのがわかる。
今日は真夏日で、やしやさんの肌にも大量の汗が浮かんでおり、
熟れた雌肉の汗腺は、濃厚なスメルを周囲に放ち続けていた。

「やしゃさんって、コミマにはいつも参加してたんですか？」
「ええと……結婚する前は、学生の頃から夏冬ともコス参加してたの。
だけど子供が生まれてからは、しばらくブランクがあつて……」
「あ、そうですよね、お子さんいらしたんですよね」

「ええ。まだ小さいから、今日は旦那の実家に預かってもらってるんだけどね」
そう言うと、キャラクターと同じく、リアルに『人妻』でもあるやしゃさんは、
たわわな乳肉を揺らしながら微笑んだ。
この爆乳とケツを好き放題にして、
挙げ句種付けまでしやがった旦那がうらやましい……！

パニャツ

パニャツ



「昔は制服系のコスが中心だったんだけど、さすがにこの年齢じゃキツくなっちゃって…」
「なるほど。でも、ブーディカは年齢相応だし、やしゃさんに似合ってますよ！」



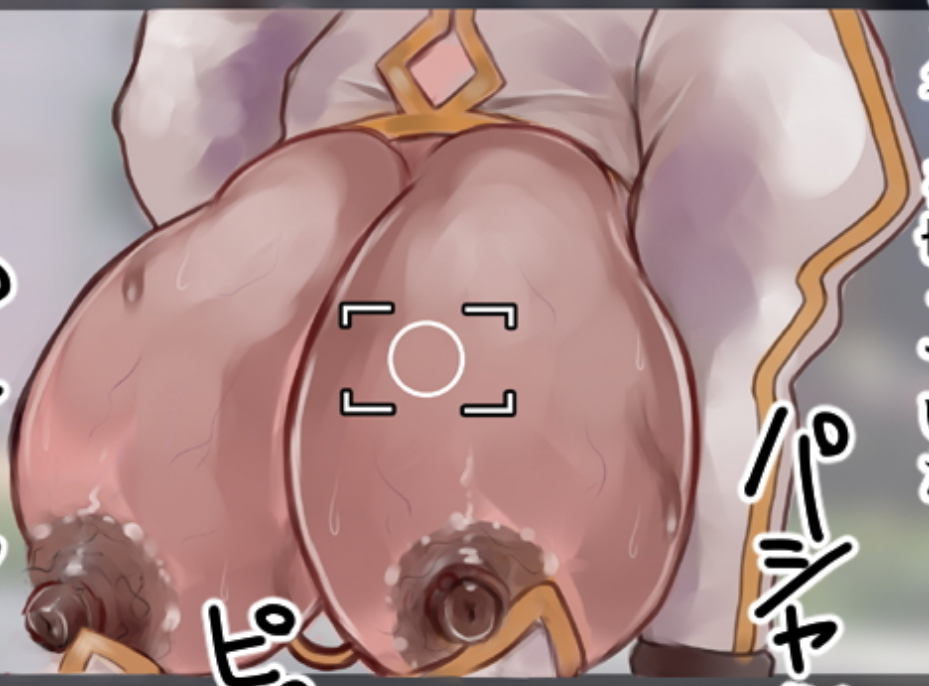
「ふふっ、ありがと。この衣装、大急ぎでつくったからいろいろなところ作りが甘いよ。
なにか変なものが見えてたら教えてね」
「も、もちろんですよ！」

ポロリしてたら教えて、と言われたものの、俺は衣装の端から溢れている乳輪……いや、乳首にズームを合わせて、何枚もシャッターを切っていた。

人妻に相応しい、使い込まれて黒ずんだ乳首。数年前まで、ここから母乳も漏れていたのだから。まさか、あの憧れの八島主任の生乳首をこの目で拝むことができるとは……!!



M 101 24M RAW+J 60i



パニヤッ

パニヤッ

パニヤッ

1/3 F5.6 4|3|2|1|0|1|2|3|4|5+ 9%

「つ、次はバックシヨットお願いできますか？」
「いいわよ。こんな感じで大丈夫？ ごめんなさいね、お尻おつきくて」
「いやいやいや！ そのポリリユームがいいんですよ！」



むちいっ♡

ぷりんっ♡

乳輪丸出しの爆乳もチンポにビンビンくるが、
人妻のたるんだケツ肉も興奮が半端ない…！！
やしやさんが身をよじるたびに尻たぶもむっちりと揺れ、
波打つ柔肉がなんとも扇情的だ。

俺はカメラをズームさせると、その尻肉……
パンツからはみ出すように生えたケツ毛へとピントを合わせていく。
（うわ…なんだこの下品なケツ！？ たまんねえ……！！）



ツッターやコスプレROMでよく見るレイヤーさんは、
無駄毛処理をキチンと終えており、パイパンなのはもちろんのこと、
尻毛、腋毛の剃り残しなどもつてのほかの世界だ。
その風潮が悪いとは言わないが、俺はこの無駄毛…
やしやさんの剛毛の茂り具合に、興奮を覚えていた。



「キミはその、コミマにはいつも来てるの？」

まさか会社のなかに、コミマ参加者がいるなんて思わなかったわ」

「えーと、実はサークル参加もしてて…弱小ですけど、同人誌も描いてるんです。明日、三日目に参加するんですけど…」

ニレツ♡

「そうなの!? 作家さんだったんだ! 会社じゃ微塵も

そんな素振り見せてなかったわよね?」

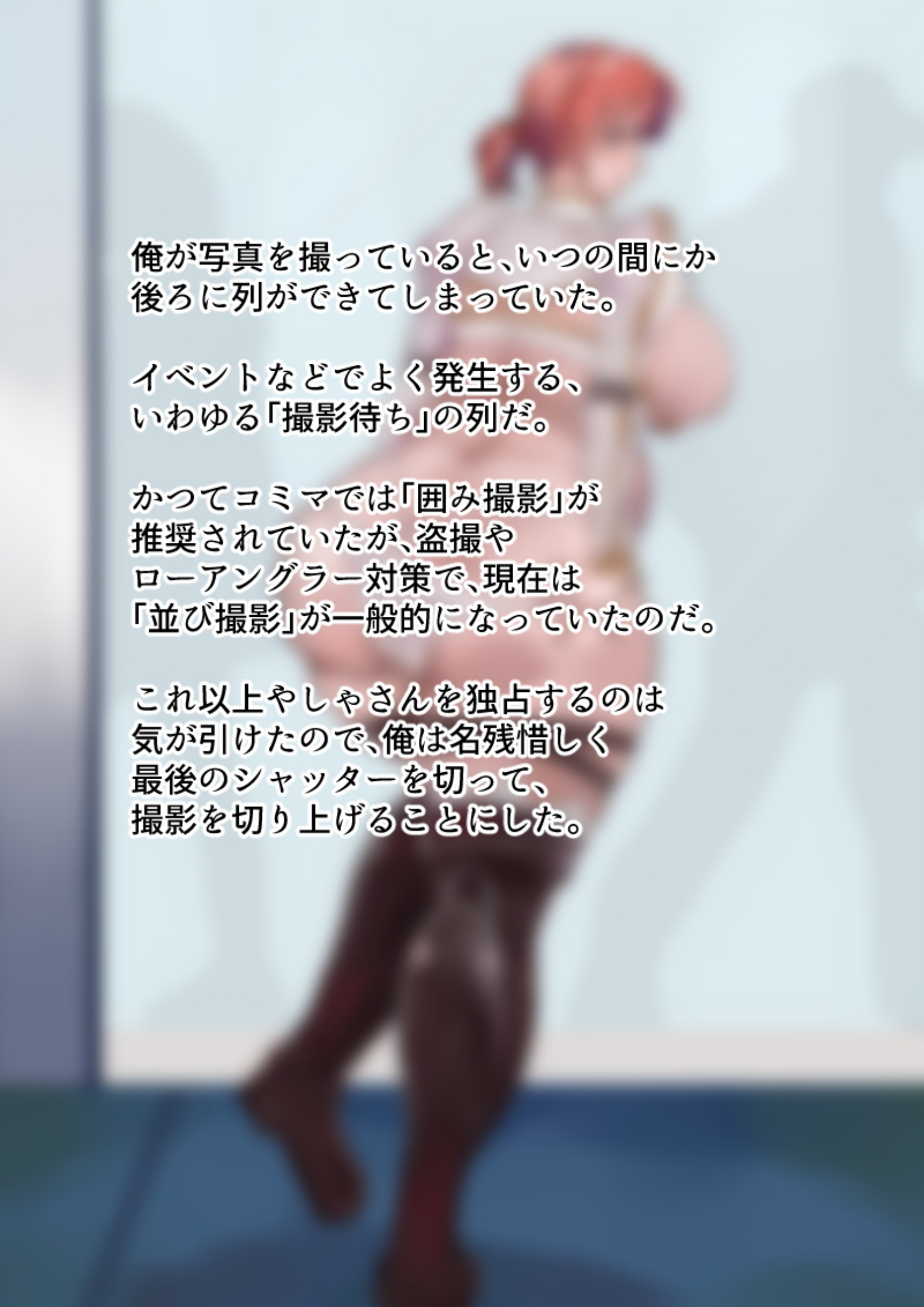
「それはやしやさんだって同じですよ。まさかこんなにエロ……

いや、セクシーなレイヤーさんだったなんて」

「そうね、私もずっと隠してたし…まあ、お互い様かな。

でも、知り合いに写真撮られるのはじめてだから、なんだか照れるわね…♡」





俺が写真を撮っていると、いつの間にか後ろに列ができてしまっていた。

イベントなどでよく発生する、いわゆる「撮影待ち」の列だ。

かつてコミマでは「囲み撮影」が推奨されていたが、盗撮やローアングラー対策で、現在は「並び撮影」が一般的になっていたのだ。

これ以上やしゅさんを独占するのは気が引けたので、俺は名残惜しく最後のシャッターを切って、撮影を切り上げることにした。

「撮影ありがとうございます。写真データ、良ければ送りますようか？」
「え、本当？ 自分の写真、撮ってないから助かるわ」

そう言つて、屈託の無い顔で微笑むやしやさんだつたが、
胸元からは乳輪、そして色素沈着した乳首がチラチラと顔を出し、
俺の劣情を刺激し続けていた。

ちゅらっ♡

「そうだ。もし可能なら……お願いしたいんですけど、
明日、僕のサークルで売り子とか、手伝ってもらえませんか？」
「え？ 私に……？」

「はい。実は新刊がブーデイカ本なんで……渡りに船というか」

むちい♡

「すごい偶然……！」

キミもブーディカ推しだったのね！」

「そうなんですよ、実は。弱小の島中なんで、そんなに人こないから、やしやさんは最初の一時間は買ひ物に行っても大丈夫ですよ」

「でも大丈夫？　こんなオバさんがいたら、逆に人がこないんじゃない？」

「問題ないです！　みんな八島……やしやさんの写真、撮りまくってたじゃないですか。需要ありますよ！」

「そ、そう？　それじゃせっかくだし、やってみよう……かな？　売り子なんてはじめてなんで、上手くできなかつたらごめんなさいね」



こうして俺は交渉の末に、やしやさんに売り子をお願いすることとなった。

もしも断られたら、ふざけて「コスプレのこと、バラしますよー？」とか言ってみようかとも思ったが、その必要はなかったようだ。

『売り子なんてはじめてだから、凄く楽しみ』という言葉添え、やしやさんは要請を快諾してくれた。

俺のサークルはぶっちゃけ弱小で、刷り部数はマックスで五十冊。今回の新刊も、二十冊捌ければ万々歳という弱小サークルだ。客が大挙して押し寄せるわけでもないし、開幕直後が忙しいわけでもない。

やしやさんが広告塔になって、少しでも皆の目を惹いてくれればそれでよかったのだ。

あとは……純粹に、あのエロムチなボディを隣で視姦できるという悦び、これが一番の楽しみだった。

明日はスケブを描くフリをしながら、後ろからあのだらしのないケツを、舐め回すように見てやろう…！

やしやさんとLINEアドレスを交換した俺は（…同じ会社の間人と、これが初めてのアドレス交換だったが）明日、サークル入場に間に合うように、東京国際展示場前駅で待ち合わせを約束して、その日は別れることとなった。

ちなみに俺もやしやさんも、遠方からコミマに参加しており、都心に宿泊を余儀なくされていた。

俺はビッグサイトから一時間ほど離れたビジネスホテル、やしやさんは短大時代の友だちのところに泊まるらしかった……。

そして、次の日。

「おはようございます」

「おはようございます、今日も暑いですね」

コミマ三日目の朝。昨日よりも熱気が増した参加者の波に揉まれながら、俺とやしやさんは駅前で合流した。

やしやさんは野暮つたいシャツにタイトスカート。そしてメガネ。俺の知っている八島主任のイメージに近い格好だ。昨日さんさんカメコたちに粘着されていたエロボディは、服の下に窮屈そうに収められていた。

「じゃあ、行きましようか。サークル入場はこっちです」
「私、サクチケで入るのははじめてなの……! 開幕ダツシユ、見れるかな?」
「八島主任、ホントにオタクなんですね……サクチケとか開幕ダツシユとか、
すらすらと出てくるところが本物っぽい……!」

俺がそういうと、やしやさんは照れながら苦笑いを浮かべる。
その表情は、子持ちで人妻とは思えないほどに愛らしかった。
こんなに趣味が合う彼女がいたら、毎日が楽しいだろうなと思いつつ、
俺はやしやさんを先導するようにサークル入場口へと向かった。



そして、やしやさんと合流してから二時間後。

コミマ開会の合図とともに、ビックサイトが地響きで揺れる。やしやさんは衣装に着替えるなり、買い物に行かずにブリスに来てくれた。

新刊



がんばれ♡

がんばれ♡



たゆんっ♡

あちっ♡

もちろん、今日も昨日と同じブーデイカの衣装。
『よく更衣室から出られたな……』と言うくらい、
今日も上も下もギリギリ……というか、
見えてはいけないものが明らかにみ出していた。

ブーデイカッ♡



ブーデイカッ♡



「新刊あります、見ていって下さい……！」
通りのいい、やしやさんの声が通路に響く。
いまは開幕直後ゆえ、ほとんどの参加者が壁サークルや
誕生席の大手へと足早に向かっていた。

しかし中には、やしやさんのグラマラスなコスプレに目を惹かれ、
俺のスペースに立ち寄る参加者も散見された。
彼らは新刊の内容のほうではなく、きまつて売り子である
やしやさんのエロボディを、舐めるように視姦していた。

新刊

おんどりちゅっ



おんどりちゅっ

おんどりちゅっ

♡
×
♡
+

ぶるんっ♡

むちっ♡

「い、一部……下さら」

「はい、四百円です」

「あ、あの……お姉さんの写真、撮ってもいいですか？」

「えーと、ごめんなさい、ここじゃ撮影NGなので。
あとでコスプレ広場のほうに行きますから、その時にお願ひしますね♡」

本が売れるたび、やしやさんは決まって写真撮影を求められていた。
しかし、コミマでは規定の場所以外ではコスプレ撮影は禁止されており、
そのつど、やしやさんは断りの言葉を並べていた。

✕

ぷりん♡♡

あち♡♡


「やっぱりコス売り子さんがいると違うなあ。

開幕直後にこんなに売れたのは始めてですよ」

「え？ そうなの？ この本の出来なら、もっと売れてもいいと思うけど」

「でも、まさかキミが成人向けの本を描いてたなんて思わなかったわ」
「す、すみません、事前に伝えておくべきでしたが……」

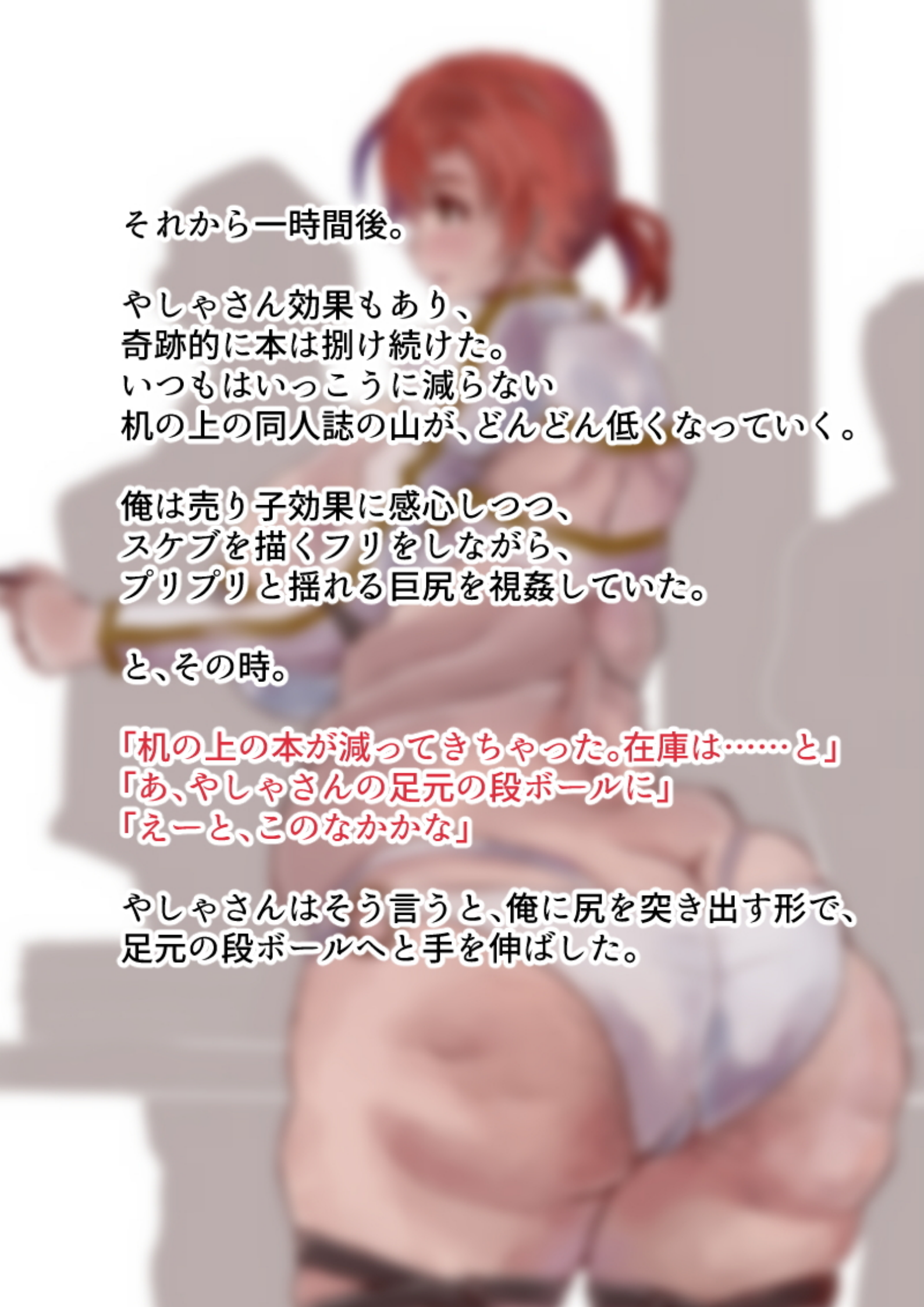




「大丈夫よ。お互い大人なんだし。私は好きよ、キミの絵柄。
キャラ愛もあって……あとは、女の目から見ても『実用的』ですものね。ふふっ♡」
「そ、そうですか？ 知り合いに同人誌を見せたのははじめてで、
照れくさいですが…リアルブーデイカにそう言ってもらえると嬉しいです」

くすっ♡
「リアルとか持ち上げ過ぎよ。でもさつきは『コスプレ風俗の人？
お店教えて』とか質問されちゃったし……キャラ愛はあるんだけど、
やっぱりそんなふうに見えちゃうのかな？」

やしやさんは自嘲気味に笑うと、再び客引きのために声を上げはじめた。



それから一時間後。

やしゃさん効果もあり、
奇跡的に本は捌け続けた。
いつもはいつこうに減らない
机の上の同人誌の山が、どんどん低くなっていく。

俺は売り子効果に感心しつつ、
スケブを描くフリをしながら、
プリプリと揺れる巨尻を視姦していた。

と、その時。

「机の上の本が減ってきちゃった。在庫は……と」
「あ、やしゃさんの足元の段ボールに」
「えーと、このなかかな」

やしゃさんはそう言うと、俺に尻を突き出す形で、
足元の段ボールへと手を伸ばした。

次の瞬間。

(……………!)

やしやさんのムチムチの尻肉が、偶然にも俺の眼前へと肉薄した。たつぷりと肉が詰まった熟女尻が、扇情的に俺の目の前で揺れる。

ふりっ♡

きゅらっ♡

すむっ♡

「えーっと、補充は二十冊くらいでいいかな……」

やしやさんが動くとき、パンツが股間に食い込み、大陰唇の外周がチラリと見える。おまんこが布地に圧迫され、ひりだされるように、淫靡にその形を変えていく。

ドクンっ……

(な、なんだよこのケツ……エロすぎんだろ……!)

食い込むパンツと、波打つように揺れるポリユニーミーなケツ。
チンポの付け根が痛いくらいに勃起し、
今すぐシコリ出したいほどの劣情がわき起こる。

むちいっ♡

たぷっ♡

モサッ♡

ゴソッ

当の本人は、パンツをマンコに食い込ませたまま、
罪の意識が無いまま尻肉を揺らす。
パンツの端からは、下品に茂ったケツ毛が顔を出し、
肉が詰まった巨尻をより淫猥に飾り立てていた。

以前、会社で椅子に座っている八島主任のケツを見たことがある。
重量級の尻肉は椅子を圧迫し、しりたぶは左右に広がり、
その威容を惜しげもなく晒していた。



それを見た俺は

『でけえケツだな……あのスカートの下、どんなスケベ肉が詰まってるのかな』
と想像したこともあった。それが今、尻毛を淫らに密生させ、
半裸のドスケベコスプレをしながら揺れているのだ。

キンタマ内部の精子熟成工場がフル稼働して、チンポ汁を精製しているのがわかる。コスプレの原作となったキャラクターも性的なアピールが凄かったが、眼前の人妻尻は別次元のエロさに到達している…

たぶん♡

モフッ♡

ゆきっ♡

過剰すぎる肉感、浮き上がるセルライトもエロい。スケベ全部盛りのこの尻を、「犯してえ…!」という欲望が湧き上がる。やしゃさんが人妻という身分であるにも関わらず、俺のなかでは無分別な欲望が渦巻きはじめていた。

「これでよしっ…と。ん？　どうかした？」

「い、いや、べつになにも…！　あ、やしやさん、

休憩は適当に取っていいですからね」

「ええ、ありがとう。それじゃ、もう少し手伝ったら、コス広場にでも行こうかな」

たゅっ♡

やしやさんはそう言うと、額の汗をぬぐいながら柔らかく微笑んだ。

（俺はなにを考えてるんだ…いくらエロいコスしてるからとって、人妻を犯したいだなんてさ…）

むちっ♡

熱に浮かされた自分を戒めるように、少しばかりの自己嫌悪に陥りながら、俺はやしやさんのムチケツから視線を逸らした。



そして迎えた、午後四時。

『これにて、コミッカードマーケット夏、全日程を終了致します』のアナウンスとともに、イベントは閉会を迎えた。

やしゃさん効果もあり、俺ははじめて『新刊完売』を体験した。

「ありがとうございます、やしゃさんのおかげです！」と、俺は何度も何度も頭を下げた。

頭を下げながらも、俺はやしゃさんのパンツからはみ出る卑猥なマン毛をチラ見し、チンポから先走りをにじませていたわけだが。

閉会から一時間後。

俺とやしゃさんは
ビックサイトから離れ、
ファミレスの店内へと入っていた。

「今日はお疲れさまでした。
ファミレスで恐縮ですが……
打ち上げってことで、
費用は売り上げから出しますよ！」

新刊完売の俺のテンションは高く、
明らかにいつもの陰キャな性格とは違う勢いで、
やしゃさんへと接していた。

やしゃさんもコスプレ広場で
たくさんの写真を撮られたり、
はじめての売り子を経験したりと、
充実した時間を過ごせたようだ。

彼女の口もまた、なめらかに饒舌になり、
イベント後のオタトークは弾みに弾んだ。

「え？ やしやさん、コスプレ系のSNSとかやってないんですか？」
「え、ええ。会社や家族バレが怖いんで、閲覧用の垢しか持ってないの」
「それはもったいないですねえ。やしやさんのセクシーなコスなら、
凄い数のフォロワー付きそうなのに」



××

「って、もしかして、コスプレしてるって旦那さんには内緒なんですか？」
「そう……なのよ。オタク趣味があるってことはなんとなく
気付いているみたいだけど、コスプレしたり
コミマに行ったりしてるのは知らないと思うわ」

「でもホント、びっくりしましたよ。会社で見る八島主任と、コスプレしてるときのやしやさん、まったく雰囲気が違うんで」「恥ずかしかったけど、思い切ってやっちゃった。ふふっ」



「昔はね、地味な制服系コスばかりで、写真を撮られることも少なかったの。ちなみに、はじめてのヨスは月姫のさつきだったわ。時代を感じるでしょ？」

やしやさんはそう言うと、照れくさそうに笑った。

月姫は確か、俺がまだ小学校あたりに流行ってた作品だ。

この人は本当に年季の入ったオタクなんだな…。

「でも昨日のコスプレ広場、やしやさんの囲み凄かったですよね！
今日も広場に行ったとき、囲まれたんじゃないですか？」
「え、ええ…自分でもびっくりしちゃった。
やっぱり、流行のジャンルは強いのかしらね」

「いやー、やしやさん本人の魅力ですよ。間違いない」

俺は、ボタンの外れたワイシャツの隙間から見える谷間を視姦しながら言うと、
オーダーしたメニューが来るまで、
コミマの話題を扱ったまとめサイトを見ることにした。

ちゅっ♡



だが…そこで見た記事に、俺は視線を奪われてしまう。

「あれ？ これやしやさんじゃないですか？

『夏コミで見かけた激エロ露出レイヤー』……凄いい、まとめられていますよ！」

「え？ うそ……！！ SNSへの掲載は許可してないのに……」

「うーん、もしかして盗撮されて、勝手に上げられたんですかね」

俺がスマホを差し出すと、やしやさんは頬を赤らめながら、困った顔で画面に視線を注いでいた。



やしゃさんのコスプレ写真は無断掲載されて勝手にまとめられており、そこには性的な煽り文句が踊っていた。

『【朗報】ブーティカマンソンのポロリ爆乳』

『ブーティカコススのグロ乳首見たい奴おりゆ？』

『ケツ毛ボーボーのエロ熟女がコス広場にいた件』

……などなど、やしゃさんの写真は完全に性的な視点で扱われており、局部をズームした扇情的な盗撮写真が数多く晒されていた。

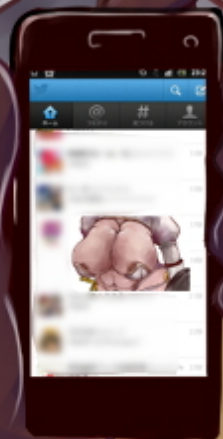
「あ、うそ……こんなに乳首見えてたの!?
やだ、アソコもこんなにアップで撮られて恥ずかしい……っ」

やしやさんは俺のスマホ画面を覗き込み、
自分の赤裸々な写真を見ながら、ただただ赤面していた。

かああっ

「しよ、しようがないですよね。人気者や話題になった人間は
晒されるといふ風潮というか……」

と、俺がそう呟いたその時。



まとめサイトのコメント欄に、
『あのレイヤー、今日は乳首とマン毛晒しながら
ブーデイカのエロ同人誌売ってたぞ』
という書き込みが見つかった。

どうやら今日、俺のブースで売り子を
やっていたところも抑えられていたらしい。

そのコメントの続きには
『今頃サークル主とハメてんじゃね？
あのドスケベボディで
オフパコしないとか無理っしょ』
なるコメントも添えられていた。

「なんだよ、オフパコって……」

と、思わず俺が口走ったその瞬間。
やしやさんも同じ箇所を読んでいたらしく、
俺の顔へと一瞬だけ視線を注ぎ、
恥ずかしそうに顔を逸らした。

「し、失礼よね、こういう決めつけ……」
「そ、そうっすよね。オフパコなんて、フィクションっすよ。
童貞の妄想ですよね」

俺がそう言うと、やしやさんも苦笑いを浮かべ、コップの水で喉を潤した。

しかし、その後。

もじっ♡

もじっ♡

ゆさっ♡

「……でも、本当にあるのかしら。オフパコ、なんて……」

やしやさんがそうつぶやいた瞬間、ふたりの間に気まずい空気が流れる。
やしやさん自身もその空気に気付いたらしく、胸を窮屈そうに寄せながら、
下半身をモジモジと揺らしていた。



オフパコの話が出たあと、明らかに
やしやさんの雰囲気が変わった。
これは、もしかして、もしかすると…！

…いやいや、冷静になれ。相手は人妻。
しかも会社の上司だ。
爛れた関係になるのはもちろん、
そういう含みを見せるのも、
今後の人間関係に響く。

よくツ　ッターなどで『オフパコ』の
話題が出てはいるが、
あれはイベントの賑やかし。
既知の人間ならともかく、
イベントではじめて出会った人間同士が
セックスに及ぶなんてこと、あるわけがないだろう。

……しかし。
しかし万が一。

都市伝説にも等しいその行為が…
なにかをきっかけにして、現実味を
帯びる可能性があったとしたら？

「やしゃさん、今日はお友達の家泊まるんですよ」

「え、ええ。その予定……だけど」

「あの、ダメもとでお願いしたいんですけど……今日これから、やしゃさんのお写真、撮らせてもらえませんか？もちろん、ブーダイカさんのコスプレで」

「え？ い、今から？」

「僕の泊まってるホテル、わりと部屋広めなんで、撮影にも使えると思うんです。」

「でも、無理なら大丈夫ですよ、時間も時間だし、やしゃさんもお疲れだと思っ……！」



「そう、ね…いいわよ。キミにはお世話になったしね。」

「私のコスプレの口止め料代わり、という意味もあるけど」

「……それじゃ!」

「でも、変な気を起こしちゃダメよ。私は人妻なんだから。」

「節度ある撮影をお願いするわね。あと、データもくると嬉しいな」

ふふっ♡

「は、はいっ! ありがとうございます!」

「ううーっ! やった!」

「やしやさんの写真、自宅のPCの壁紙にしますよ!」

「もう、そんな恥ずかしいことしないでいいからっ!」

ふふっ♡



俺とやしゃさんはささやかな打ち上げを終えたあと、ホテルへと移動した。

移動する最中も、イベント最中に見たやしゃさんの肉感的なブーディカコスが頭の中にチラついて、チンポはずっと勃起状態だった。

イベントでは乳首やハミ毛などを堪能できたが、もしかするとこれから行う撮影会では、それ以上のものが撮れる『事故』が起こるかもしれない……！

そう期待しながら、浴室を更衣室代わりにしてブーディカへと『変身』を遂げるやしゃさんを、俺はスマホの時計とにらめっこしながら待った。

「待たせちゃってごめんね。ウイッグかぶるの、ちよつと時間かかつちやつて。それじゃ、撮影をはじめましょうか。よろしくお願いします」

「こ、こちらこそ！ いやあ……やつぱりいい！」

「やしゃさんのプロポジション、すっごく好みですよ！」

ゆさっ♡

毛じゃっ♡

「ふふ、ありがと。お肌には自信がないから、ちよつと飛ばし気味に撮ってもらえると嬉しいかな」

「は、はいっ！ やしゃさんの美しさを

カメラに残せるように頑張りますっ！」

むちっ♡



「こういう個人撮影ははじめて」と
やしゃさんは言ったが、
さほど緊張することなく撮影は開始された。

目の前に現れたリアルな人妻英雄を前にして、
俺は興奮しながらシャッターを切りまくる。

イベント会場でも何枚か撮らせてもらったが、
ここでは人目につかないからか、
やしゃさんは自ら大胆なポーズをとってくれる。

寄せた胸の谷間や、ケツにパンツが食い込む
バックショット。
そして、衣装の端からポロリする乳首、
パンツからはみ出した剛毛などなど。
あらゆる要素が俺のキンタマを刺激し続ける。

俺は夢中になって、エロレイヤーの
痴態をカメラに収めていった。

「え、えーと、次は胸を強調するのね……?」
「こんなポーズでいいかしら?」

「す、素晴らしいです! そのまままで何枚かいきます!」

むにゅっ♡

ほろっ♡

ぐにゅっ♡

ぽかあっ♡

やしゃさんに蹲踞(そんきよ)のポーズをとらせ、おっぱいを強調させる。
すると、持ち上げた乳肉が衣装からこぼれ、完全に乳首が露出してしまふ。
俺は乳首が見えていることをやしゃさんに告げず、
興奮のままにシャッターを切り続ける。

割り開かれた股間には、パンツからはみ出した剛毛がありありと見える。未処理のマン毛はヘソの下まで繋がりに、言い訳できないほどに淫猥な痴態を晒していた。

「はあっ、はあっ……！ す、凄いつ。セクシー過ぎるっ……
シャッターを切る指が止まらないですよ！ すごい、やささん凄いつ！」
「あ、あの……キミ、もしかして……私で興奮してくれてる……の？」
「ゴクリ……しよ、正直に、言っていていいですか？ ひ、引かないでくださいよね？」
「え？ う、うん、いいわよ」

モニュッ♡

むんっ♡

モサッ♡

もじぎすっ♡

「いま僕、すっごく勃起してます。パンツの中……先走りですよ」
「……え？ う、うそ……！」
「そ、そんなスケベなコス見せられて、興奮しないわけないじゃないですか！
チンポが勃起すぎて、付け根が痛いくらいですよ……！」
「あ、ああっ……ほ、本当に、私で興奮してくれてるのね……♡」

ああっ♡

はあー♡

んぐ♡

「わ、私っ、子供が生まれてからは、夫にも求められたことがないし、
女として……もう終わっちゃったと思ってたの。
だ、だから、だからもう一度だけ、
誰かに私を女として見てほしかったから……
こんな際どいコスプレして……イベントに参加して……みただけど……ああっ♡」

ビュッ♡

「な、なに言ってるんですか！ やしやさんは十分魅力的ですよ！
メスとしての魅力に溢れまくってますよ！」

「はあっ、はあっ、あ、ああっ……♡ ほ、ホントに？ 私まだ、終わってないの？」

「…やしやさんは無自覚すぎますよ。そのドスケベボディが
どんなに魅力的か、僕が証明しましょうか？」

はあっ♡

あーっ♡

じわあっ♡

んんっ♡

「え？ しよ、証明って……？」

「……おっぱい、見せてください」

「……っ!?」

「イベント中もカメコたちにチラ見せしてた、そのけしからん爆乳を、
見せてください……いや、チンポを挟ませてくれって言うてるんですよ……ッ！」

……ついに言ってしまった。
これで俺の社会的地位はともかく、
八島主任との関係も終わりだろう。

せっかく、憧れの人とお近づきになれて、
しかも同好の志ということがわかったのに……。
周囲にオタ友がいない俺にとっては、
貴重な交友関係を築ける可能性もあったのだ。

だけど俺は、その発言を後悔してはいなかった。

目の前でたわわに弾むエロマンガのようば爆乳で
パイズリをできるなら、その肉厚を堪能できるなら、
言葉のはずみが『万が一』を連れてくるなら……。
俺は、その可能性に賭けてみたかったのだ。

「あ、ああっ……！　なんてこと……

はあっ、はあっ……こ、これって、私、脅されてるの？

コスプレのことを、夫や会社に黙っておいてほしいなら、

お、おっぱいを触らせろって……脅されてるの？」

「そうとっつてもらっても構いません。僕を脅迫罪で訴えてくれても結構です」

はああっ♡

ぐにっ♡

モワッ♡

きゅん♡

はーっ♡

むちっ♡

はふっ♡

「だけど、すべてを棒に振っても……僕はやしやさんのおっぱいを触りたい。

そのドスケベな爆乳に、チンポをこすりつけたいんですよ……！」

「はあっ、はあっ♡　あ、アレをこすりつけたいだなんてえ……！」

わ、私っ、性的な目で見られてるのね……♡　欲望のはけ口にされてるのねえっ♡」

「はーっ、はああっ…お、脅されてるなら、ほかに選択肢はないわよね。
あ、ああっ…同じ会社の人に…おっぱい、みられちゃう…っ♡
見られちゃうだけじゃなく…私の胸、なぶりものにされるのねえ♡

ああんっ♡

ピクッ♡

はあんっ♡

ぴくん♡

モワッ♡

じわあっ♡

「これは仕方のないことなのっ、私、脅されてるんだから…。
私が求めに応じないと…家族がバラバラになっちゃうっ、
会社にもいられなくなっちゃう…♡ はあっ、はあっ…。
まるでローマ帝国の奸計に嵌って、
無理やり穢されちゃうみたい…原作と同じいっ…♡」

やしゃさんは唇から荒い吐息を漏らしながら、
そのたわわな胸をさらけ出す。

俺はゆっくりとやしゃさんに近付くと、
巨大な乳房へと手を伸ばしていく。
乳房の先端では隆起した乳頭が揺れていた。

熱を孕んで上気した
人妻コスプレイヤーの肌が、間近に迫る。

制汗剤では隠しおおせない、
熟女の淫肉の薫りを鼻孔に感じる。

室内はクーラーが効いているはずなのだが、
部屋が蒸し風呂に感じるほどに、
俺たちの周囲には熱がこもっていた。

唾を飲み込んで申し訳程度に喉を潤すと、
俺は興奮のままに、憧れの人乳首を指で摘んだ。

「はひいっ！ あ、あああっ！ 乳首、摘まれて…んっ♡
や、優しく…してえっ！ 引っ張っられると、変な気持ちにっ…」
「はあっ、はあっ、ああっ！ 八島主任の…やしやさんの乳首っ！
コス広場でカメコたちに撮られまくっていた
経産婦のドスケベ乳首っ！」

がぁあっ♡

ビクッ

むにゅっ♡

ビクッ♡

ぎゅあっ

くりっ

きゅっ

くりっ

二十歳のときにデリヘル嬢の胸を触って以来、
数年ぶりに触る乳首の感触に、俺の勃起は
さらに熱を帯び、肥大化していった。

「はあっ、はあっ……やしやさんっ、この乳首……イベントの最中、ワザとカメコたちに見せてましたよね？ 撮らせてましたよね？」
「そ、そんなこと……ない……はふうっ！ あっ、んっ！ 強いいいっ！」
「嘘だっ、絶対ワザと見せてたでしよう!？」

かああっ♡

むにんっ♡

きん

くり

「ポロリしてたのに気付いてたくせに、乳首をしまわずに撮影にに応じていたじゃないか！」

「じ、事故よ……あれは事故だったの……わざとじゃない……んくう♡ あっ、ああっ！ 強く摘まむのダメえっ！」

くり

「これだけデカいおっぱいぶら下げてるのに、
胸を全力アピールするようなエロコスするなんて、絶対誘ってるでしょ？
ツイッターでやまとめサイトで晒されるのわかってるのに…っ！」

たゅん♡

んん♡

あん♡

ゆさっ♡

「あっ、ああっ！
そ、そんなに顔を近づけると……
はふうっ！ い、息がかかって……んくう♡」

「衣装からポロリして、モロ見えでしたよこの乳首！」

「今日だって売り子してたとき、乳輪穴にミってましたよね？」

「はあーっ、ああっ…わざとじゃないのっ、事故なのお…
んっ、ああっ…勘弁してえ…♡」

俺はさらに顔を近づけて、やしやさんの勃起乳首を凝視していく。
よく見ると、乳首周辺にもパイ毛が生えており、乳輪を淫らに飾りたてていた。
若いコスプレイヤーにはまずあり得ない、下品な無駄毛がさらに欲情をそそる。

はあーっ♡

あんっ♡

びくんっ♡

モガッ♡

「こ、この乳首…味あわせてくださいよ。
ちよつと前まで、お子さんが吸ってたんでしょう？
「ま、待ってっ、だめ、だめえ…っ。
撮影だけっていったじゃない……」

「最近、旦那さんは吸ってるんですか、この乳首？
放置されたままじゃないんですか…!?」
「あ、ああっ♡ …それは確かに…そうだけど」

「あむっ……むちゅっ! はぶっ、んっ! んんんーっ! れるうっ」
「んくうっ! あ、ああーっ! だ、だめえっ!」
そ、そんなにイヤらしい音を立てて吸っちゃ……んぐうっ!」



「はあっ、はあっ、爆乳レイヤーの生乳首っ!」
イベントで晒していた無料配布乳首、すげえ美味しいっ!
「はひいいっ! おっぱいだめえっ!
あっあっ! はあああーっ!」

れるう

「はぶっ、んっ! んちゅっ……
ちよぴり汗の味がするっ、れるっ、んっ!」
「やだっ、やめてえっ!
くひいいん! はあああーっ!」

だめなのおっ!
ずぞぞぞっ!」

「じゅちゅっ、むちゅっ！ あ、ああっ…
…やしやさんの乳首っ、口の中で固くなってきたっ！」

ちやばっ

ピクニッ

ピクニッ

「ああーっ！ んくうっ！ だ、だめえっ！」
「エロ乳頭、すっかり勃起してますよっ！
んちゅっ、れるううっ！」
「そ、それは君が、そんなイヤらしい
吸い方するからあっ！
はあっ、あ、ああーっ！」

「…はあっ、はあっ、ダメだっ、
チンポがギン勃起してどうにかならちまいそうだっ…！」

俺はやしやさんの乳首から顔を離すと、ジーンズのチャックへと手とかける。
そして…いきりたつたイチモツを、爆乳人妻レイヤーの眼前に晒していく。

「はあっ、はあっ、見てくださいよ！ このガチ勃起……！」

誰のせいでこんなになったと思ってるんですか……！」

「あ、あああっ♡ い、勇ましいっ！ そんなに急角度でアソコが勃つなんて……！」

「もう、撮影している場合じゃないですよ……！」

コイツの責任、とってもらえますか？」

はあっ♡

はあっ♡

んくっ♡

ビーン

「せ、責任をとると言ったって……私、どうすればいいか……！」

「とりあえず挟んでくださいよ。その馬鹿デカイおっぱいで！」

「……!! は、挟むって、そんな……っ！」

「パイズリですよ、パイズリ！ 旦那相手にも

さんざんやってあげたんでしよう!？」

俺は勃起をやしやさんの顔に近付け、腰に力を入れてビクビクと跳ねさせる。
今日一日の猛暑を経て、パンツの中で蒸れに蒸れたペニスからは、
自分でもわかるくらいに濃厚な雄の匂いが拡散していた。

はあっ
はあっ

はーっ
はーっ

「〜
むわっ
むわっ

しかしやしやさんは俺のチンポから目を離すことなく、
熱のこもった荒い息を漏らし続ける。

「はーっ♡ はああっ♡ このぶっといのを…

私の胸で…挟むなんてえ…はあっ、んんんっ♡」

たぶん

「あ、あの……私そのっ、実はパイズリ……したことなくて」
「ええっ!?! この爆乳でパイズリしたことないとか嘘でしょ!?!」
「お、夫は淡白で、特殊なプレイには興味が……なかったのよ……」
「マジで? こんな立派なおっぱいを遊ばせといたんですか?
信じられないっすよ!」

かあぁっ♡

これだけの威容を誇る爆乳が、『パイズリ未経験』という
信じられない発言を聞き、俺は目が眩むような衝撃を受けた。
この爆乳を遊ばせとくのは国家的損失だ……
俺は可及的速やかに実地指導を行うことにした。



「あ、あ、うそっ、ダメっ、はあっ、あ、ああっ……熱いのが、
固いのが私の胸につ……はさまってるうっ！んくうっ！」
「お、おっ、入ったっ！ やしゃさんの胸なら、
そのままチンポを突き刺す縦パイズリも可能なんですよ！
ああっ、なんて肉厚だ……き、気持ちいいっ！」

じゅぶぶっ♡

おにゃっ♡

「あ、ああっ！ 私っ、一線を越えちゃった……
夫以外の性器を、こんな……っ、んくううっ！
コスプレして……おっぱいで挟んじやうなんてっ。
性行為にバストを使われちゃってるうっ……！」



「そ、そうそう、乳肉をこすりあわせるようにして……」

「お、おおっ！ 肉厚が気持ちいいっ！」

「んくうっ！ あっ、あっあっ！ 竿が……先っちよが

ドクドク脈打ってるのがわかるうっ……」

「お、お、おおっ！ オナホなんて比べ物にならない……本物の

ブーデイカにパイズリされてるみたいだ！ すげえ、すげえっ！」

んっ♡

あっ♡

たぽっ♡

ちゅっ♡

くっ♡

ぎゅっ♡

「はあーっ、はあーっ、あ、熱いっ、身体が……熱いっ。

わ、私、脅されてるからしようがないのっ。

パイズリしないと、えっちなコスプレイヤーだってこと、

みんなにバラされちゃうっ、

家族に知られちゃうっ、会社に知られちゃうからあっっ！」

「やしゃさんは旦那より前に付き合ってた人はいないんですか？
この爆乳を…んくっ！ 使わないなんてありえないでしょ？」
「む、昔はそんなに大きくなかったから…
高校を卒業したあと、いきなり大きく…んっ、なりはじめてえ」
「じゃあ、高校のときにえっちはしたことがあるんですね。
それ以降は旦那一筋だったってことか…！！」

ゆさっ♡
ぎゅゅ♡

「はあ、はあっ！ やしゃさんの写真を撮っていたカメコはさ、
全員こんなことを想像してたんだよ！
乳首ポロってる爆乳にチンポ挟みたいって、
勃起しながらシャッターを切ってたんだよっ！」

「はふうっ！ あ、ああっ♡ そ、そっうなの？」
み、みんな私を…そんな性的な目で…見てたのかしら。んっ、んくうっ！」

「やしゃさんみたいなのドスケベレイヤー、オカズにされないほうがおかしいでしょ！みんな今頃、撮影した写真を見て抜きまくってますよ！この爆乳を、ポロった乳輪を、はみ出た乳首を見ながらね！」

かあぁあぁっ♡

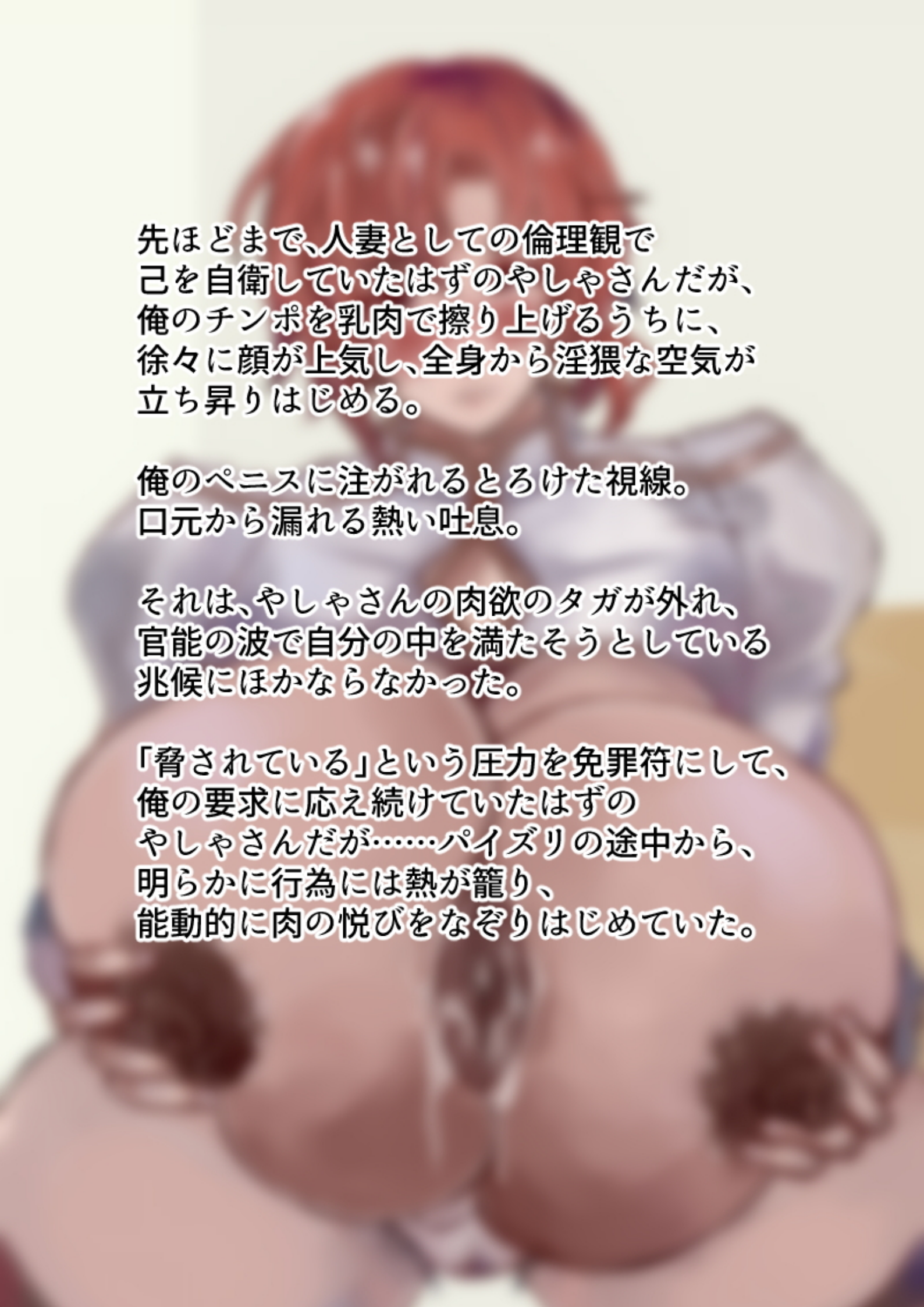
ぐんぐんっ♡

にちゅっ♡

「あ、あぁっ！はふうっ！
言わないでえっ、んくうっ♡
自分が哀れになるのおっ！
ズリネタにされたくてっ、オカズになりたくて
露出コスしてた惨めな人妻レイヤーだって現実っ、
ひしひしと感じちやうのおおっ！」

あっあっあっ♡

はぁーっ、はぁーっ♡



先ほどまで、人妻としての倫理観で
己を自衛していたはずのやしゃさんだが、
俺のチンポを乳肉で擦り上げるうちに、
徐々に顔が上気し、全身から淫猥な空気が
立ち昇りはじめる。

俺のペニスに注がれるとろけた視線。
口元から漏れる熱い吐息。

それは、やしゃさんの肉欲のタガが外れ、
官能の波で自分の中を満たそうとしている
兆候にほかならなかった。

「脅されている」という圧力を免罪符にして、
俺の要求に応え続けていたはずの
やしゃさんだが……パイズリの途中から、
明らかに行為には熱が籠り、
能動的に肉の悦びをなぞりはじめていた。

「はあっ、はあっ……すごいっ♥ キミの性器……
こんなに固くっ、こんなに太くっ……胸が……火傷しそうっ……」
「性器なんて上品ない方じゃなくて、
エロレイヤーっぽく言ってくてくださいよ。
カメコチンポとかさ……!」

はーん♥

んくら♥

「んっ、あ、ああっ! カ、カメコチンポお……♥
私で興奮してくれてるおちんぽおっ!
はあっ、あああっ♥ こんなに勃起してえっ、
先走りもドクドク出すなんてえっ!」

ずちゅっ♥ にちゅっ♥
ずりゅっ♥
くちゅっ♥
ちゅっ♥



「うっ！ くうううっ！ ホントにパイズリ
はじめてなんですか!? これ、凄過ぎるっ……!
才能ありすぎでしょ……!!
竿だけじゃなく、キンタマもまとめてこすりあげるとか
…あぐっ！ ううっ！ や、やばい、出るっ！」

ふんふんっ♡

ふんふんっ♡

「あ、あ、ああっ！ ヒクヒクしてるっ！
もしかしてイクのっ？ 私のおっぱいで出しちゃうのっ!?!
はあっ、ああっ♡ あ、ああっ！ んっ！」
「イクっ！ 出すぞっ！ ブーディカレイヤーの胸にっ！
溜めに溜めた特濃ザーメンぶっ放してやるからなっ！
ぐううっ！ おっ！ お、おおーっ！」

にちゅっ♡
ぐちゅっ♡
ぬゅっ♡

ずちゅっ♡
むぎゅっ♡
ぎゅっ♡

「あ、あ、ああっ……凄いつ♡ ザーメンって
こんなに出るものなの？ それに……熱くて濃いつ……
この匂い……クラクラきちゃうつ♡ はあつ、はあつ」
「コミマのためにしばらくオナ禁してましたからね。
今日の俺のキンタマ、ハンパなく精子溜まってますよ……」

憧れだった上司が、エロいコスプレのまま
俺のザーメンを浴びる……
こんな夢のような現実があつていいのだろうか。
その淫猥な光景は再び俺の下半身に熱をもたらし、
射精したばかりのペニスは再び反り返っていく。

ドロォ……

べトォ……

ムワツ

「ほら、やしやさん、次のデイリーミッションですよ。」

「お掃除フェラ、お願いしますよ。」

「え？ お、お掃除フェラって……ここ、コレを舐めるの？」

「当たり前でしょ？ このチンポはやしやさんのエロコスで

勃起して、やしやさんの爆乳で射精したんですよ。」

「最後まで責任をとるのがスジでしょ。」

はっはっはっ
はっはっはっ

はっはっ
はっはっ

「そ、そうね……私の責任ですものね。」

「キミが我慢できなくなったのも、

「パイズリ射精しちゃったのも……私のせい……」

「はあっ、はあっ♡ 責任……とらなきゃ」

ドロオ……

ブトオ……



「んっ、んぶううう……んちゅっ、はむうっ♡

じゅちゅっ、んぶっ、ずぞおおおおっ……!!」

「お、おおっ! いい、いいっ! 下品なバキュームっ!

竿の中に残ってるスペルマ、全部吸い出せっ! んくぐううっ!」

「んぶっ、ずぞっ♡ ちゅばっ、んぼっ♡ じゅるるるっ!

んぞおおおおっ!」

ずぞっ♡

じゅるるっ♡

じゅぶっ♡

ちゅくっ♡

「は、ははっ! いいですね、そのマラ乞いひよっご顔っ!

ドスケベレイヤーに相應しい下品顔ですよ!」

「んーんっ、んっんっ! んぶっ! はむうううううっ♡」

「くっ! うううっ! やしやさんのクチマンコ、

すげえ気持ちいいっ……! もっと使わせてもらいますよ!」

「んぼおっ！ んっ、かぼっ！ んんっ、んーっ！
むちゅっ、んぶっ、んっんっんーっ！」

俺は腰を突き出すと、やしやさんのクチの中に、勃起チンポをねじ込んでいった。
熱を帯びたヌルヌルの口内が、チンポに絡みついてくる。

はふーっ
はふーっ

んぶっ♡

れるうっ♡

くちゅっ♡

ぴちゅっ♡

んぶっ♡
はふう♡

パイズリを所望しなかったという旦那も、クチマンコは使っていたのだから。
やしやさんは歯を立てることなく、俺の勃起を貪欲に吸い上げる。
頬をすぼめて亀頭を吸うたびに、爆乳もたわわに弾み、俺の目を楽しませていた。

「カメコチンポに吸い付くや人妻レイヤーの顔、素敵ですよ！

記念にスマホで写真撮るとききますね！」

「んぶうっ！ んっ、んーっ♡ らめえっ、はぶうっ！

撮らないでえっ！ んっ、んちゅっ、じゅるるるっ♡」

んぶっ♡

れるう♡

んちゅうううう♡

かああ♡

パニャッ

パニャ

ミラーレス一眼から持ち替えたスマホが立て続けにシャッターを切り、

露出レイヤーのフェラ顔が記録されていく。

俺が写真を撮る間も、やしやさんはクチからチンポを離さず、

先走りを滴らせる亀頭へと、濃厚な口淫を続けていた。

むわっ♡

「んぶっ、むちゅっ、はぶうっ……ああっ、ふ、ふといいっ、んっ♡
あむっ！ んーっ！ 喉の奥までっ、
届いて……はぶっ♡ んんんーっ！」
「お、おおっ！ 亀頭に舌がまとわりついてっ、
キンタマ震えるくらいに気持ちいいっ！」

はぶうっ♡
はあっ♡

ぶくん♡

ちんぽっ♡
ちんぽお♡

れるうっ♡

じゅるっ♡

んちゅううっ♡

「んぼっ、んぶっ！ んんっ！ ちゅぶっ！ んっんっんっ！
はぶうううっ！ 先走りっ、こんなにいっ！
はーっ♡ はあああっ！ 私が勃起させちやってるうっ！
このおちんぽっ、私で勃起してくれるうう！ んぶう♡ れるううううっ♡」

「せきにんっ、とらなきやっ……れるうっ♡ちゅぶっ!

私のせいでっ、こんなに勃起してっ、劣情を催してえっ、

しゃぶるうっ、ご奉仕しますうっ! んっんっ! むちゅううううっ♡

あなたっ、ごめんなさい! 今から私っ、

オクチで他人汁受け止めますううっ! んーっ♡ れるうううっ!」

ふーっ! はふうっ♡

あっあっんん♡

じゅぼぼぼっ♡

ずぞっ♡ れるうううっ♡

ちゅぶぶぶっ♡

ビ

ビ

「あぐううっ! そ、そんなに強く吸われたらっ!
出ちまうっ! もう一発でるうううっ!
おおっ! おっおっ! 憧れの上司の口マンコにっ、
全力射精するからなっ! くううううっ!」

「んぶうううううーっ！ んぐっ♡ はぶううううっ！
はあっ♡ 出てるううううっ！ んーっ！」

「お、おおっ！ イクうっ！ んぐううううっ！
おっ、おおっ！ 亀頭がしびれるっ、あぐううううっ！」

ビクッ
ビクッ
ドグッ
ビュルルルウ

「はふうっ！ ん、んああっ、こ、濃いのがっ、んぶうううっ！
じゆるっ、んんーっ！ あっあっ、のどに…からまって…んちゆうううううっ♡」

口内発射を受けたやしゃさんは、肩を震わせながら濃厚な雄汁を嚥下していく。
白い喉が動くたび、ドスケベレイヤーの体内にキモオタ劣性遺伝子が沈んでいった

「はあ、はあ、はあっ……だ、出したぞっ！ 人妻のクチマンコにつ、ドスケベレイヤーの口内にたっぷりザーメンだしてやったぞっ！」
「はあ、ああっ……んっ、あ、ああっ♡
わ、私っ、なんてことを……はあっ、んぐうっ……♡」

はあーっ♡

はふっ♡

ドロオ…

己の所業を悔い、懺悔するような言葉を並べつつも、やしやさんの目には消えることのない肉欲の炎が、さらに燃え広がっているように見えた。まるで「その先」を望むがごとく、貪欲な快楽を求めているように、俺には感じられたのだ。

快感に身を焼かれているのは俺も同じで、
二発連続で放ったばかりだというのに、
ペニスの勃起はまったく衰えていなかった。

自分でも同人誌を描くほどに好きな
キャラクターに扮した、憧れの人妻上司。
その熟れた肉体が、俺の前で淫らな熱を
放ち続けているのだ。

昨日のコスプレ広場で見せつけられた、
カメコたちの集団視姦撮影。
そして今日一日は、俺の隣で熟れた媚肉を
晒していたのだ。

今の俺のキンタマは雄汁を全力精製し、
莫大な量の獣欲を貯蔵している。
この程度で満足するはずが…
一度や二度の射精程度では
満たされるはずはなかったのだ。

俺は、口内発射を受けて放心している
やしゃさんに近寄ると、その手を取って
腋下を曝け出させる。

かあめあめあつ♡

「きゃうっ！ な、なにを……っ！」

ムワッ♡

やしやさんの腋の下には、コスプレ広場で見たと通りの剛毛が茂っており、制汗剤でも隠しきれない雌の匂いを放っていた。

タアッ♡

「なんすか、このエロい腋っ、ポーポーじゃないですか……！ こんなに無様に生やして……女やめてんじやないですか？ ありえないでしょう……！」

「んっ！ あ、ああっ♡ そ、そんなにつ……じっくり見ないでえっ」

モサァ

しびりッ

「見ないでもなにもコスプレ広場で、
やしやさんがカメコたちにみせつけてましたよね？
原作のブルーデイカの服、こんなななに腋開いてないと
思うんですけど、腋が見えるように、
自分でカスタムしてますよねコレ？」
「あ、あぁっ……んくうっ……」

ビクッ

俺はやしやさんのムレムレ腋毛をつまむと、ゆっくりと引っ張ってみる。
毛根がしっかりと根付き、一本一本が細い針金のような剛毛だ。
それは汗と腋臭で湿り気を帯び、先端部分は
股間の恥毛のごとく淫猥に縮れていた。

ふーっ♡

ふーっ♡

ムワッ

ぐんぐん

「んくうっ！ はひいっ！ ひ、引つ張らないでえっ！

「旦那さんは知ってるんですかコレ？」

妻の腋がこんなみつともないことになってることに

「はあっ♡ あっ…し、知らないわ。あの人はもう、

私にカラダに興味を持ってないからあっ…んくうっ！」

「ホントにヤラしいですよ！ こんなに茂らせて、無様に生やしてっ！」

「あ、ああっ…！ ごめんなさいい…♡

女として終わっててごめんなさいっ、んひいっ！ んくうっ♡」

「やしゃさん、ホントに反省してます？ この腋が

どれだけヤバいか、身体に教えこむ必要があるんじゃないですかね…！」



はあっ♡

んっ♡

はーっ♡

はーっ♡

ムワッ

ゴクン

俺は座っているやしやさんの腋に、
屹立した勃起をゆっくりと近づけていく。
自分の腋に近付いてくるペニスを見ながら、
やしやさんの口から荒い息が漏れはじめる。

「ああっ！ う、うそ……まさか、私の腋にっ、それを擦り付けるの？

はふう♡ バキバキに勃起したカメコチンポをブラシ代わりにして、

私の腋を……ゴシゴシしちゃうのおっ……!？」

「……その通りですよ。やしやさんの腋、これっでもう性器でしょ？
腋マンコで、思いつきりシゴかせてもらいますよ！」

ショーン

ニヒレツ

「んああっ！ あっ、はああっ♡ あーっ！
おちんちんが私の腋にいつ！ あっああっ！
ポーポーの腋毛っ、ゴシゴシされてるうっ！
んーっ！ 恥ずかしいっ♡ あっ、はあんっ！
情けなくて死んじゃいそうっ♡」

ビクウ

んんっ♡

ビクン
ピクツ

「ぐっ、うううっ…すっげえ剛毛っ…！ どんだけ恥知らずなんですか！

こんななみっともない腋、大勢のカメコに撮られてたんですよ！
中には、眉をしかめてたやつもいましたけどね！」

「はふうっ！ あっあっ♡ わたしっ、軽蔑されてたのねっ！

腋毛レイヤーキモいとか思われちゃったのねえっ！ ごめんなさいっ！」

ビクッ

モワッ

ショリッ

ムルッ

はあーっ♡

はあーっ♡

れるう♡

むちいっ♡

「やしやさん、アナタは本物の変態ですよ！
マン毛も腋毛も放り出して、恥知らずな
エロコス晒しておまんこ濡らしてるとか…!!
一生ネットに晒されて、写真撮影板とかで
永久にズリネタにされますよ！」

「んくっ！ あ、ああっ♡ 欲情されるのねえっ！

こんな変態レイヤーを、オカズにつかってくる人がいるのおっ!!」

「そうだよ！ アンタはド変態のズリネタレイヤーだった！

くっ、ううっ！ で、出るっ、ザーメン漏れちゃうっ！」

びゅるるるっ

どぶっ

ビクッ
ビクッ

ビクッ

「はああああっ♡んくっ! はんっ♡
あっあっ! をんおんっ! をおおん♡
来てるっ、私の腋にザーメンきてりゆうううっ!」
「ぐっ! おおっ! 下品でメス臭い腋っ、
スペルマ漬けにして清めてやるっ! んぐうっ!

「ふああああーっ! あっあっ! はひいっ♡
効くううっ! はふうっ! 腋射されてっ、わたしもっ…!!
んくうっ! イくうっ! はひいっ♡
あ、あ、あ、ああーっ! イくう♡ イツくうううううっ!」

はあっ♡

んくう♡

はー♡

ムワッ

ドロォ...

俺の濃厚なザーメンを腋に受けながら、
やしやさんは全身を激しく痙攣させる。
ポーポーの腋毛は白く染め上げられ、
腋臭と精液臭が入り交じり、やしやさんの
上半身からは淫らな湯気が上がっていた。

「は、はひいつ、あーっ、あっあっ、こんなのはじめてえっ♡
んくうっ、私の腋マンコで出してくれる人がいるなんてえ…
こんななの、こんななのってえ……んくうううっ……♡」

「はあ、はあっ、なに腋射されて
アクメ面してるんですか……
本当に救えないエロ豚ですね！
まだ終わりませんよ…
今度はパンツを脱いで、こっちに
デカイケツを向けてくださいよ…！」

俺が高圧的にそう言うと、やしやさんは
一瞬躊躇したものの……
すぐにパンツに手をかけて、
おずおずと脱ぎはじめる。

衣装…パンツの中はすでに
マン汁でビシヤビシヤになっており、
脱ぐと同時に愛液が糸を引き、
マンコとパンツの間に透明な橋をかけていた。

そして俺に向けられる、肉がみっちり詰まった露出レイヤーの巨尻。
そのポリユームーミーでだらしないケツ肉を見て、
俺のペニスには、さらに力がみなぎっていく。

はーっ♡
はあーっ♡

んくっ♡
はあーっ♡

ピクッ

ヒクッ

ムワァッ

ヒクッ

ピクッ

「はあっ、はあっ♡ あ、ああっ……こ、これでいいの……？
んっ、あ、ああっ……大事なところも恥ずかしいところも……
全部見られてるうっ……はあん♡
お願いだから、見るだけにしてえ……っ。
それ以上のことは堪忍してほしいのっ……んくうっ♡」



たぶんっ♡

むちっ♡

「許すかどうかは俺が決めますよ。

ほらっ、そのデカイケツをもっと揺らしてください!」

「はふうっ……こんな感じかしら」

「そうそう、スケベすぎるでしょう、このデカ尻!
こんな下品なケツを晒してコスプレするなんて、
公然ワイセツ罪ですよ!」

「会社員なんてやめて、ま○ろ物産から

現役コスプレイヤー女優としてデビューしたほうが
いいんじゃないですか!」

「はあん♡ そんなこといわないでえ

私には……夫も子供もいるんだからあ……ああっ♡」

かあああっ♡

はあっ♡

はあっ♡

「ほらっ！ もつとケツ肉を割り開いて下さいよ！
アナルもおまんこも丸見えになるくらいに！」

「んっ、んんっ……………！ はあっ、ああっ♡
こ、これで……………いいかしら」

「…うわあ…肛門の周り、ケツ毛ビッシリっすよね」

はあっ♡

んんっ
くううっ

ああっ♡

ヒクッ

モサッ

トロオ…

「コスプレしてる時にも見えてましたけど……
さすがにコレはヤバイですよ。

腋毛もかなりキてましたけど、
女として以前に、人として終わってるレベルです。

よくこの汚ケツで人前に出れますね……！」

「あああっ！ はあっ！ い、いわないでえっ！
んくうっ♡」



ペロツッ：

やしやさんの股間に顔を近づけると、チーズに似た、えも言われぬ乳製品系の媚臭が立ち昇る。俺はその匂いを吸い込みながら、熱がこもった股間へと舌先を伸ばしていく。

ビクッ

ビクッ

ビクッ

「れるう……っ、ちゅばっ……！ エロレイヤーのデカケツっ！ 尻毛ボーボーの汚ケツうっ！」
「んんんっ！ や、やあああっ！ だ、だめえっ！
あ、あ、ああっ♡ 舌がアソコがあたって…
はふうふうっ！ はあ、んぐうう……っ♡」

ちゅはっ
れろお

トロオ……

「はあっ、はあっ！ なんだこの匂いっ、この熱っ！
無茶苦茶チンポ勃起しますよ！ こんなに蒸らしてっ、
マン毛もケツ毛もボーボーにして！
マン汁だって垂れ流しじゃないですかっ！
んぶっ、ちゅびっ、じゅるるるっ！」

ビクウ

ヒクツ

ビクッ

フルルツ

「ひゃひいいいいっ！ あっあっ！
だ、だめえっ！ 吸っちゃだめえっ
ををん！ おおっ♡ あっぐうっ！
おん♡ おんおんっ！ んくうううーっ！」

やしやさんの秘裂からはマン汁が止めどなくあふれ出し、
したたり落ちては床を濡らしていく。
股間の剛毛は俺のよだれと愛液でグシヨグシヨになり、
救いようのないくらいに淫らな熱を発散し続けている。

んっ♡あっ♡
はあ♡んっ♡

はあーっ♡
はあーっ♡

ビクニ

トロオ…

ヒクツ

ビク

「はあっ、はあっ、はああっ……やしやさんっ、
俺、この下品なマンコに入れたいです。」

エロレイヤーとオフパコしたいっ……!」

「……! あ、ああっ♡ やっぱり、そこまで行くのねえっ……!」

でもダメえ。それだけは……堪忍してえっ」

荒い息と艶かな嬌声を漏らしながらも、
やしゃさんは最後の一线を死守しようと
首を横に振る。

しかし、俺の勃起はもう完全に、
収まりがつかない状態になっていた。
ヒクつくやしゃさんの雌穴も、
さらに強い刺激を求めているのは明白だった。

「やしゃさん……このドスケベな
身体を放置しておくのは無理でしょ？
こうなるんじゃないかって期待して、
エロいコスプレしたんでしょ？」

「あ、ああっ…ああっ……だめえ♡
誘わないでえ…私っ、はふうっ…♡」

「セックスするのは八島主任じゃないですよ。
コスプレイヤーのやしゃさんですから。
ね？ これって浮気じゃないでしょ？」

「あ、ああっ…そ、そう……よね。
ここにいるのは八島美佳じゃない…
レイヤーの『やしゃ』なのお…はあっ、はあっ♥」

「しましろうっ、オフパコ。
俺なら、やしゃさんのスケベな腋も、
ケツ毛ボーボーのお尻も、
そしてグシヨ濡れのおまんこも…
全部に愛を注げますよ！
俺にっ、ブーディカさんと
セックスさせてください！」

「あ、ああっ…イベントのあとに
カメコと行きずりのセックスなんてえっ！
そう…いまの私はエロレイヤーのやしゃ、
そして、私とパコろうとしてるのもお、
会場でたまたま出会ったカメラマンなのおっ♥」

「ハメましょうよ、やしゃさんっ！
ご無沙汰マンコで、若いチンポを啜えましょう！」

俺はそう宣告すると、
避妊具もつけてない生勃起を、
濡れそぼった秘裂へとねじ込んでいった。

じゅんじゅん

「んぐうううううっ！ あ、あ、あああつ！ ふ、ふとおおいつ！
んをつ！ ああつ！ 固くて熱いのが、わたしの中にいいつ！」
「んぐうううううっ！ な、なんだこのマンコっ、溶けそうなほど
熱いつ！ すっかり発情してんじゃねえか！ おぐっ！」

ビクッ

むちっ

んくーっ
はあっ

あっあっ
んひいっ

ヒクッ

「はひいっ！ あ、あああつ！ ほおっ！ おっほ
待ってたのおつ！ わたしっ、ずっとまってたあつ！
女として求められるのをっ！ んぐうううっ！
おまんこにつ、固くて太いのをぶち込まれる瞬間をおおつ！
まっでだのおおおん」

ピニッ

パンパンパンツ

じゃぶっ

ビクッ

ヒクッ

おんおんっ♡
はみいっ♡

ずぶっ

「うぐっ！ 生ハメしてやったっ！ ブーデイカレイヤーと
オフパコしてるぞ、俺っ！」

「動きますからねっ、このトロ穴、たまんねえっ！」

「あ、あああっ！ 中っ、え、えぐられてるうっ♡」

「カリ高チンポでズコズコされてえっ！」

「あふうっ！ おっほ♡ はふうううーっ！」

「やしゃさんのマンコは子供をひり出したと思えないほどに
締めまりがよく、膣壁には何重にも肉が重なり、まるで
インギンチャクのような触手のように俺のチンポへ絡み付いてきた。
ピストンのたびにケツ肉がはずみ、結合部から愛液がしぶく。」



「んぐううううっ！ おっほ♡ ほおおおっ！
深いっ、深いのおおおっ！ ああーっ！
こんなに深くまでオチンポ入れたのはじめてえっ♡ いいーっ！」
「はあっ、はあっ！ やしゃさんにレンズを向けてたカメラコたちは、
みんなこうしたかったんだよっ！
ドスケベレイヤーとオフパコしたかったんだよっ！」

はみいっ♡
んぐうううっ♡

おっほ♡
おんっおんっ♡

ヒクッ

じゅぶじゅぶ
パンツ

パニッ

ずぼっ

パニッ

「いいっ、気持ちイイのおっ！ わ、わたしっ、
こうなることを望んでたのお！ えっちなコスプレをすれば、
こんなみつともないデブ女でも、みんなの気を惹けるかもって♡
オフパコ狙いのヤリチンカメラコから声をかけられてっ、
若いチンポを啜えられるって思ったからっ！
んぐううううーっ！ おっほ♡ おおおおをん！」

ビクッ

パンツ
パンツ
パンツ

ペニスを突き立てるたびにやしやさんの全身から淫らな熱が立ち昇り、ピストンの動きに合わせて爆乳が弾む。その水風船のような激しい揺れは俺の肉欲をさらにそそり、勃起に力を与えていった。

「ぐっ、ううっ！ し、搾られるっ、チンポギチギチになるっ！」

ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

んーっ♡
あっあっあーっ♡

ヒクッ

「今日は大丈夫な日だからあつ！ 中につ、中にくださいいっ！濃厚種汁どっぴゅんしてえっ、直射してえっ♡ 年下カメコの発情チンポ汁っ！ 恵んでえっ♡ 施してえっ…！ お願いしますう、おねがいじまずううっ！」

「このドスケベレイヤーがっ、生出してやるっ！溜めに溜めたザーメンっ、全部ぶちまけてやるからなっ！」

「んくううううっ！ イグうっ！ おっほ！ ほおおっ♡
イグうっ！ イグイグイグっ♡ イツくうううーっ！
をん！ おんおんっ♡ 生出し食らってイグうっ！
はひいっ！ はあああーっ！」
「お、おおっ！ 出すぞっ、全部出すぞおおっ！
ぐうううっ！ エロコス生出しで子宮を満タンにしてやるっ！」

おんぐーっ
おっほあ♡

「はひいんっ♡ あーっ！ あっあっ♡
夫以外の精液がどぶどぶきてるうっ！ んくうううーっ♡」

やしゃさんの中に突き入れた亀頭の先端が弾け、白濁が雌穴を
瞬く間に満たしていく。キンタマの精子工場がフル稼働して
精製したザーメンが、人妻マンコの中に大量に流れ込み続ける。

ピクッ
ヒクッ
ビュルルッ
どぶっ

トロオ...

「あぐうっ! はあーっ! あ、ああっ! んぐうっ!

いいっ、久しぶりのナカ出しいいっ……!

あーっ、はああっ、女の幸せが蘇るうっ……んぐうっ!」

「はあっ、はあっ……まだですよ、こんなんじや収まりませんよ!」

ピクッ

ピクン

「今日一日、やささんでどんだけチンポ勃起てたと
思っでんですか。次は……俺の上に乗っってください。

腋毛を晒しながら、そのデカイケツを振っってくださいよ!」

「あ、ああっ……振るうっ、振りますうっ……!

チンポの上で踊らせてえ♥ エロコスのまま

ケツを振らせてくださいいいっ……! んっ、くふうう♥」

ポ
ハ
ッ
ホ
ッ

俺がベッドに横たわると、やしやさんは股間からザーメンをしたたらせたまま、その媚肉を揺らしながら、俺の上にもたがってくる。そして、上唇を軽く舐めたあと、火照った顔のまま、ゆっくりと腰を下ろしていく。

「んっ…はあっ♡
固いのが、当たって…んぐっ！
んんーっ！」

はふーっ♡
んぐーっ♡

おちんぽおちんぽ
おちんぽおちんぽ♡

「あ、あぁーっ！
私で勃起してくれるチンポっ、好きっ、大好きいっ！
はぁーっ、はあっ♡
もつと私で欲情してえっ、はふうっ♡
エロコスレイヤーのおまんこっ、チンポケースにしてえっ…！」

ムワツ♡

ムチイ♡

くちゅっ♡

しゃぶっ♡

「んぐっ、はあっ♡ あ、あぁーっ！ 固いのきたあっ！

はふうっ！ あ、あぁーっ！ 入ってるうう！ さっきより深く刺さってるっ♡」

「ぐっ、うっっ！ 肉厚マンコがチンポにまわりついて……くるっ！ ぐううっ！

腋毛晒しながら騎乗位フアックとか、最高に恥知らずですよ！」

はふっ♡
んぐっ♡

おーっ♡
さきゅっ♡

ゆさっ♡

タプッ♡

じゅんじゅん
ずんずん

「はーっ、はあぁーっ♡ う、動いていい？ んぐうっ！」

年甲斐もなくっ、いつぱい腰を振っちゃうからっ！

んーっ！ あっあっ♡ コスプレAVみたっ、

デカ尻振りながらズボズボしちゃうからあぁっ！ んぐううっ♡」

「あっ！ んっ♡ はああっ！ オチンポの形がはつきりわかるうっ！

私のスケベなコスプレでっ、こんなにチンポ勃ててえっ！ 嬉しいっ、嬉しいっ♡」

「ぐっ！ ううっ！ マン肉がねっとり絡み付いてきて……さ、最高だっ！」

「おっほ！ おをん♡ 一番気持ちいいところにズボズボささるうっ！」

んぐー♡
はひー♡

おっほ♡
おっほ♡

ビクッ♡

モクッ♡

ビクッ♡

ビクッ♡

じゅぶらうっ

くちゅらうっ

「んーっ♡ あああーっ！ ご無沙汰マンコにじゅんじゅんきちやうううっ！

はふうっ！ 欲求不満マンコが嬉し泣きしてるううっ♡ ああーっ！

エロコス発情雌マンコにっ、もつとちようだいっ、固いの欲しいのおっ！」

やしやさんは自ら腰を振りながら、俺の勃起を雌穴で締め上げていく。ピストンのたびに爆乳が激しく弾み、水風船のように豊かに形を変えていく。腕は高々と頭上に掲げられ、腋の下に繁茂した剛毛は丸見え状態になっていた。

んぐーっ♡♡
ひゃひっ♡♡

はひっ♡♡
おちんぽっ♡♡

モサッ♡

ヒクッ♡

タプッ♡

じゅぶらうらうら

ずぼっ♡
ぐもちゅ

「んぐうらうらっ！ あっあっ！ もっとおっ、

もっ私の恥ずかしいところ見てくださしいいっ！ んぐっ！ はあっ♡

ローアンされて感じてたわたしをっ、カメコに囲まれて

おまんこ発情してた撮られたレイヤーのわたしをっ、

んぐうらうらっ！ もっと見てえっ、ズリネタにしてえええっ♡」

「あ、あ、ああっ！ バキバキのオチンポっ、ぴくぴくしてきたあつ♡
出るの？ また出しちゃうのっ♡ ぷるぷるスペルマっ、
スケベ精子を人妻マンコに恵んでくれるのお!?!
んぐううっ！ はひっ♡ おをん！ おんおんっ♡ はひいっ！」

あーっ♡
あっあっあっ♡

くるっ♡
くりゃきゅ♡

ヒクヒクヒクヒクツ

ゾクゾクツ♡

ずぶっ
ぐらっ

じゅわんっ

「ぐうっ！ そらっ、子宮の入り口開けっ！ 安全日だろうが着床させてやるっ！
ドスケベ子宮にぷりっぷりのザーメン、たっぷり種付けしてあげますよっ！」
「はひいっ！ チンポ種仕込んでえっ♡ あーっ！ ひぐううーっ！」

「んくううっ…連続ナカ出し決められるなんて…ひさしぶりい…♡」
JKのときに…体育教師に乱暴されたとき以来なのおっ…♡」

「……！ やしゃさん、もしかしてレイプされたことあるんですか？」
「あ、ああっ！—いやっ、わたしっ、なにを口走って……！ んっ、ああっ♡」

「はあっ、はあっ！ やしゃさんがスケベな告白したから、またチンポ
勃ってきたじゃないですか……！ 追加ハメいいですか、今度は正常位で……！」

「はああん…凄い性欲うっ♡ 疲れ知らずのケダモノチンポなのねえっ……！
凄いっ、若いっ、いいっ♡ 私っ、求めてられてるっ、嬉しいっ、んんっ♡」

ビクッ

ヒクッ

ピクッ

ピクッ

ヒクッ

ドブウ…

ドロオツ

やしやさんはベッドの上でその身を横たえると、種付けされたての雌穴を俺に向け、荒い息を吐きながら股間を広げる。秘裂からはナカ出しザーメンが流れ出しており、周囲の陰毛にからまって、卑猥な光景を作り出していた。

「こんなにエロい下半身して……どんだけオスを誘ってるんですか！

はあ、はあっ、マン毛とケツ毛丸出しておっぴるげ……

コレが貞淑な人妻がすることかよ……俺のキンタマを過労死しちまうよ！」

「あ、ああっ♡だめえっ、言わないでえ……そんな恥ずかしいこと言われると……んくうっ、身体が……火照っちやうううっ♡」

あふっ♡
んーっ♡

はあっ♡
はひっ♡

はふっ♡
んぐっ♡

ヒクッ
トロオ

ヒクッ

毛サッ♡

「おまんこのナカ、中出しザーメンで洪水状態ですよ。

ドスケベマンコ、精子タンクになってるじゃないですか……!!

最初っから、こうなることを望んでたんですか？

「んっ、あ、あぁーっ！ そう、そうよっ♡

チンポ日照りのおまんこに、ケダモノのようなバキバキの

肉棒をねじ込んで欲しかったのっ！」

あんな♡
んなー♡

かあぁっ♡

「カメコたちに乳首見せたりマン毛はみ出させてたのも、

もしかして全部計算づくだったんですか？」

「ち、違うのっ…最初は完全にガードしてたのおおっ！」

でもっ、乳輪チラ見せしたら、どんどんカメコが増えちゃって、

それが嬉しくてっ！」

んぐっ！ あっ♡ さ、最後にはわざとみせてましたあっ♡」

ぐんぐんっ
トロオツ…

「旦那に黙ってこんなドスケベなコスプレして、自分のカラダで欲情してくれるカメコを誘ってたとか…

恥知らずにもほどがあるでしょう!」

「はーっ♥ はああっ、ごめんなさいいっ! お、お詫びに犯してくださいます!」

淫乱レイヤーの詫びマンコっ、

たくさん使ってほしいのおっ! あ、ああーっ!」

はあはあっ
はあはあ♥

ちんちんっ♥
あちんぽあちんぽっ

「い、いまチンポ挿れられたらっ、私だぶん終わっちゃうっ!

でもっ、いいのおっ! はあーっ♥ ああっ! ハメてっ、

その極太でトドメをさしてええっ!…! んぐっ♥ オフパコっ、したいいっ!」

「わかりましたよ。それじゃ要望通り…ぐしよ濡れメス穴、

こちらで塞いであげますよ!」

ぐんぐん

トグツ
ビク

「ングウ！ き、きたあつ！ あ、ああつ！ カリ高極太の年下チンポっ、私のマン肉をかきわけて……あぐっ、んっ！ はいってくりゆうっ！ お、おおんっ！ はあつ、あつ！ こんなに大きいと、おまんこが形覚えちゃうううっ！ ガバマンになったら、夫に浮気オフパコがバレちゃうううっ！」

あーっ♡
んぐううっ♡

ほみっ♡
おっほ♡

ビタメ♡

じゅぶらんっ
ずぶらんっ

「ぐっ、ううっ……そ、その心配はないんでしょ？ 旦那の枯れたチンポじゃ、

もうやしやさんのスケベ穴は満足しないですよ！」

「あ、ああつ♡ そ、そうなのっ！ ぶっといのがいいのおおっ！

動いてっ、奥までズンズンついてえっ♡ エロレイヤーの欲望穴でっ、

チンポしごきまくってくださいいいっ！ はふううっ♡」



「あっあっ！ きたあああっ♡ ハアアッ！ おまんこ墮とす
ズコハメピストンが奥まできてりゆううううっ♡」

「ぐっ！ 締まるっ！ オフパヨマンコがギチギチに締め付けてくるっ！」
「はああっ！ あーっ！ あっあっ♡ んぐうっ！ しゅっごいっ！」

はんっ！ 子宮まで手加減無しのパistonきてゆうううっ！ んぐうーっ♡」

んぐーっ♡
ひふう♡

おんおんっ
はひーっ♡

ピクッ
ヒクッ
じゅぷっ
ずぶっ
ずぶっ

「ぐっ、ううっ！ い、今頃、やしやさんの露出写真を撮ったカメコたちは、
家で乳首やハミ毛をアップにして、チンコしごいてますよ！」

「はふうう！ オっ♡ うッ♡ あーっ！ わたしをつかってえっ♡
もっと見ていいからっ♡ オナペットにして欲しいのおおっ！」

「はふうう！ オっ♡ うッ♡ あーっ！ わたしをつかってえっ♡
もっと見ていいからっ♡ オナペットにして欲しいのおおっ！」

「んぐっ！ ううううっ！ まとめサイトに書き込まれてたコメントが
現実になつてゐるじゃないですか！ サークル主と売り子のオフパコっ！
どうせならハメ撮りして、あとでツイッターに放流しますか!?」
「あーっ♡ らめええっ！ それだけはらめえっ！
な、なんでも言ううこと聞くからあっ♡ んぎいいいっ！ はああっ♡」

んぐーっ♡
おっほ♡あん♡

ちんぽきてるう♡
おんっ♡おんおん♡

ビクッ♡
じゅぶっ
ずぶううっ

「じゃあ、やしやさん、これからも俺のサークルで売り子やってくださいよ！
エロコス着てイベントに参加して、視姦されるやしやさんを見たいんですよっ！」
「あんっ、んっ♡ わ、わかりましたあっ…!! で、でも、条件があるのっ！
イベントのあとっ、必ずハメてほしいですうっ！ オフパコも
付けてくれるならっ、専属の売り子にっ、オフパコ穴になりましゅうっ♡」

「なら決定だっ……!! やしやさんのスケベ穴っ、イベントのたびに
犯し抜いてやるからなっ!!」

「はふううっ! おをつ♡ おん、おんおんっ!
じ、子宮にぎでるううっ! あぐううっ♡ ひっ! いぎいらいららーっ♡」

ほみっ♡はっひ♡
くううっ♡あはあっ

しゃきいっ♡
オフ。バユ。ハニ。お♡

「すきいっ! ケダモノチンポでズヨられるのっ、しゅきいいいっ!
もつとわたしでちんちん固くしてえっ♡ おっおっ! んぐうっ!
エロコス露出狂の変態レイヤーで、たくさんザーメンひりだしてえっ!
おぐっ、おんっ! イグうっ! イグからあっ! あっあっあっ♡
弾けりゅっ! んぐうっ♡ はあああーっ!」

トクッ♡

ぐちゃ
じゅぶっ

びくっ♡
ぶっ
ぶっ



「はひ…あ、あ、あああつ…すきいっ♡
あ、ああつ…はあつ♡ はああつ♡
特濃ザーメン、染み渡るううっ…

わ、わたしい…まだ、女として終わってなかったあ…あんっ、んっ♡
こんなになくさんチンポ汁恵んでもらえて…はひっ、しあわせ♡ はああん♡

はひっ♡
んくっ♡ はひっ♡

おまんこしゃべり♡
セーシすきい♡

「はあ、はあ、はあつ、気持ちよかったですよ、やしやさん。

このドエロいマンコ、使わないなんてもつたいたい…。

欲求不満のそのカラダ…今度から、俺がとことん使い倒してあげますよ…!!」

「あ、ああつ…嬉しいっ♡ オスに求められるのがメスの幸せ…♡

私、これからもコスプレするから…カメコにやらしい姿を晒すからあ。

もつとみんなに見てもらおうために…ズリネタになるために…はあん♡」

ヒクッ♡
ピクッ♡
トロオ…
ゴボツ



「こっちに目線下さい!」
「お尻突き出してもらっていいですか!」

パニヤツ

やしやさんを困んだカメラマンたちから、熱のこもった言葉が飛ぶ。
裸同然の媚肉を揺らしながら、やしやさんはカメラマンたちに視線を投げていく。

むちいっ♡

ぷるん♡

夏コミから一ヶ月後。俺とやしやさんは、関西で行われる大型同人誌即売会に参加していた。併設されているコスプレ広場で、やしやさんは新作のコス、ブーデイカの礼装水着姿を披露していたのだ。
もつとも、布面積は原作よりも極小で、至る所から
見えてはいけないものがはみ出しまくっていたのだが。

パニヤツ

「こっちにも視線お願いします！」

カメラマンたちの中に混じった俺が声をかけると、やしやさんは扇情的に尻肉を揺らしながら、俺のほうへと視線をよこしてくる。身体を動かすたびにむっちりとしたケツが弾み、周囲からはシャッター音が重なって響いた。

はあっ♡

んんっ♡

むにっ♡

ぷりんっ♡

パニヤッ

パニヤッ

夏コミ後、俺とやしやさんは会社の中で何回かすれ違ったが、その時は言葉を交わすどころか、視線をあわせることもなかった。あくまでも日常生活の中では、向こうは会社の上司、八島主任であり、俺は部署違いの同僚の一人に過ぎないのだ。

「おい、あれまとめサイトで晒されてた露出レイヤーじゃん」
「見た見た、腋毛ボーボーの変態女な」

やしやさんを侮蔑するようなヒソヒソ声は俺の耳に届くが、
その発言の主たちも、やしやさんにカメラを向ける。

ちようどやしやさんがポーズを変え、水着から乳首がポロリした瞬間だったからだ。
おまけに、腕を高々とあげた腋の下からは、未処理の剛毛が顔をのぞかせていた。
やしやさんに向けられるカメラの数は増え続け、周囲に淫猥な熱気が立ちこめる。
カメラを向けている俺自身も、熱気にあてられて勃起していたのだ。

ムフツツ♡

ポロン♡

モサツ♡

むちい♡

SNSもコスプレサイトにも登録していない、イベントにしか現れない謎の痴女レイヤー。その話題は、一部のカメラマンの間で広まりつつあった。今日のやしやさんの写真も、まとめサイトに晒されることだろう。

はぁっ♡

んっ♡

たぷん♡

むちっ♡

パニヤツ

しかし、彼女の豊満な肉体を実際に味わえるのは俺だけだ。今日もイベントが終わったあと、今着ている水着のまま、とことん犯し抜いてやる予定だ。

パニヤツ

彼女に、着せたい、リクエストしたいエロ衣装は、まだまだ何着もある。
そして周囲にバレない限り、やしやさんも露出コスが続けたいとの願望を抱いていた。

「はあっ♡ はあっ♡ もっと…もっと私を見てくださいいいっ♡」

ぎゅゅゅゅゅ♡

やしやさんの唇が動き、声にならない言葉を紡ぎ出す。

はみ出す乳首と、パンツに収まりきれないマン毛。そして、卑猥に茂った腋毛。
やしやさんから立ち昇る淫らな熱が、俺の下半身を猛烈に刺激する。

コスプレ広場での偶然の出会いは、これからも俺の欲望を
さらに加速させてくれることだろう…。